

家庭科

目指す子ども像

- 自分なりの考えをもち、自立した子ども
- 自分の生活を楽しくとる子ども
- 自分の生活をよりよいものへと創造していく子ども

実践の場

- 家庭生活
- 学校生活
- 社会生活

実践したいという意欲

価値の多様化

- ・家庭のあり方の多様化
- ・家庭というものの価値観の多様化

学習のステップ

ふり返る

- ・適切なくらいかどうか
- ・快適で楽しいくらいかどうか

表現する・実践する

- ・自分のくらしを工夫する = 豊かな表現力
- 衣服の選に
- 食物の選に 作る
- 快適な暮らしを築く

感じる・考える・想像する

- ・自分のくらしを判断する
- ・自分の生活に置き換えて考える
- ・自分のくらしの改善点がわかる

気づく

- ・自分の生活と見つめる
- ・自分自身のくらしを知る

自分のくらしを判断するための手立て

- ・胎と違うくらしのバリエーションの体験
- ・友達との意見交換
- ・体験を通じた知識・技能の習得

自分のくらしに気づく手立て

- ・自分のくらしの観察・記録化

自分のくらしに対する感覚

- ・快適であるという感覚
- ・より快適なものを求める

個人差

くらしに対する関心

- ・食べもの、衣服、住居に関心がある

8 家 庭 科

植 田 順 子

1 家族や家庭生活の変化

現在、様々な社会の変化に伴い、家族という形態は多様化してきている。生活を共にしない家族も増え、家庭そのものに対する価値観も様々で、家族を一様に定義づけることも難しくなっている。また、家庭における個人の生活時間の重視、家庭や地域社会における人間関係の希薄化などによって、家庭をとりまく生活環境は著しく変化し、子どもたちに大きな影響を与えている。家族一人一人の生活が多忙化し、また子どもたち自身も習いごとや塾にと忙しく、家庭で過ごす時間、家族と共に過ごす時間は減少してきている。今、家庭、家族そのものが根底から揺らいでいる。

今一度、家族とは、家庭とは何かということに目を向けなければいけない時期にきているのではないだろうか。家族とのふれあいを大事にし、人間としての生活を見つめ直すためには、豊かな感性を育むことが大切になってくるのではないかと考えた。

2 感性を育む家庭科学習

(1) 感性とは

感性とは、「価値あるものに気づく感覚」であると定義されている。¹⁾ 具体的には、「物や事象に何を感じ、表現するかということ」である。家庭科では、生活を見つめ、その中に価値あるものを見だし、自分の生活をよりよいものへと創造していく力を育むことが、感性を育むことにつながるのではないかと考えた。

(2) 目ざす子ども像

感性を育むという視点から、家庭科ではどのような子どもを目ざすかを次のように考えてみた。

自分なりの考えをもち、自立した子ども

○自分の生活を楽しもうとする子ども

○自分の生活をよりよいものへと創造していく子ども

(3) 豊かな気づきや感じ方を育む家庭科授業のあり方

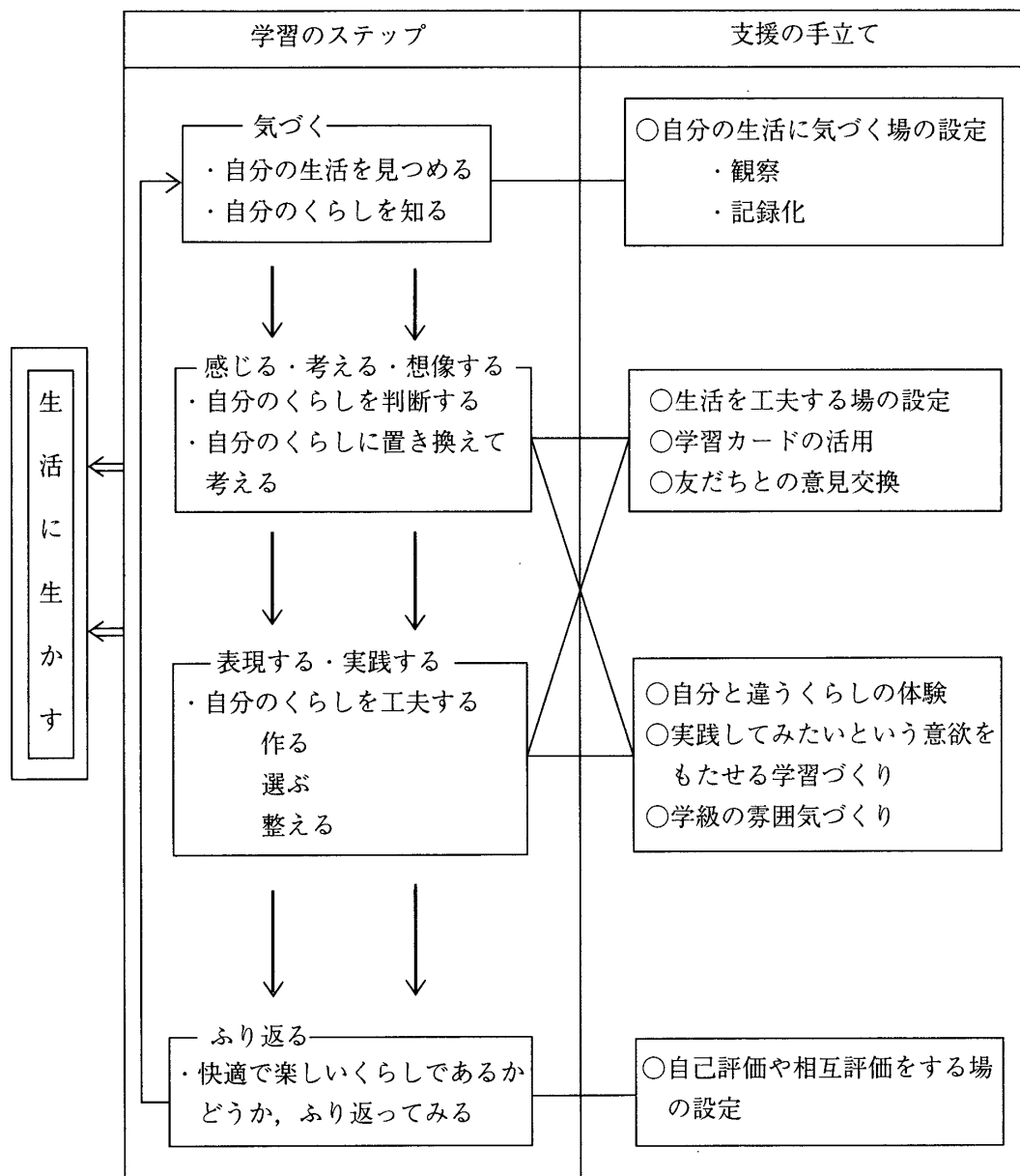
子どもたちの感性を揺さぶり、豊かな気づきや感じ方を育む家庭科授業を展開するためには、次のような点が大切であると考えられる。

- ① 一人一人の生活実態の把握につとめ、子どもの生活経験に応じた活動を設定する。
- ② 子ども一人一人の思いや願いを生かし、子どもが積極的にかかわっていくことができるような教材を工夫する。
- ③ 具体的な体験を通じた知識・技能の習得をはかる。
- ④ 一人一人の考え、発想、よさを大切に、友だちとの意見交換の中で、よりよい価値へと気づいていけるような学習を展開する。
- ⑤ 自分の生活を見つめる機会を多く設け、くらしに対する関心を高める。
- ⑥ 子どもたちが、のびのびと活動できるような雰囲気作りをする。

(4) 学習のステップと支援の手立て

生活を楽しく快適なものにするためには、まず自分の生活を知ることが必要である。これが、生活を見つめ、「気づく」というステップである。次に、「感じる・考える・想像する」というステップでは、友だちと意見を出し合いながら、どのように工夫すればもっと生活が快適になるかを探っていく。そして、「表現する・実践する」というステップでは、子どもの思いや願いを生かして、実際に作ったり選んだりという活動をすすめていく。さらに、自己評価や相互評価によって学習を「ふり返る」ことにより、また新たな課題に気づき、次のめあてを見つけることができる。このような学習を通して、よりよい価値に気づいていくことができると考えられる。

また、豊かな気づきや感じ方を育むためには、子どもの主体性を大切にしながら、常に教師が適切な支援をしていくことが必要である。



<参考引用文献>

- 1) 片岡徳雄『子どもの感性を育む』日本放送協会 1993年